

■大津皇子 天武天皇の皇子、のちの持統天皇が生んだ異母弟草壁皇子との対立から、罪を着せられ非業の死を遂げた。

おおつのみこ

白村江の戦い・663= 生。天武天皇の皇子。母は天智天皇の女大田皇女。百濟救援のため斉明天皇以下が筑紫に出陣した際、娜の大津で生まれた。大津の命名はこの出生地名による。

壬申の乱・672= 9歳：壬申の乱の時、初め近江大津宮にあったが脱出し、大分君恵尺らを伴として伊勢国朝明郡で父天武一行と合流することに成功した。

高市皇子・草壁皇子に次ぐ天武の第3子であったが、生母の身分を考慮すれば天武の10皇子中の序列は草壁に次いで第2位であった。容貌雄々しく能弁であったので、天智に寵愛されたという。長じて文筆の才能も発揮したので、「日本書紀」では「詩賦の興、大津より生まれり」と評されている。「懐風藻」によると、身体容貌たくましく、度量も広大で、幼少時は学問を好み、博識で詩文を得意としたが、成長するに及び武を好むようになり、腕力つよく撃剣に巧みであったと伝える。また、性格は大らかで、時に規則を顧みないところがあつたが、己れの身分を誇示せず人士を厚遇したため、絶大の人氣があつたという。

679=16歳：*吉野宮で、天智・天武の諸皇子らとともに、今後互いに協力し合い逆らうことのないことを誓い、

680=17歳：高市皇子とともに飛鳥寺の僧弘聡の死を弔問した。

681=18歳：

683=20歳：*国政に参画することになる。「日本書紀」はこれを「大津皇子、始めて朝政を聴く」と記している。

天武天皇没・686=23歳：*草壁・高市両皇子とともに封4百戸を加えられた。これより先、大津は、新羅僧の行心により、その骨相が人臣としての人相ではなく、このまま長く臣下の位にあれば、必ずや非業の死を遂げるであろうことを告げられ、これを機に謀反計画を練り始めたという。謀反が発覚して一味30余人とともに捕えられ、早くも次の日には詔語田の舎において死を命ぜられた。その日に大津の妃山辺皇女(天智の皇女)が殉死した。

大津は大事決行を前にひそかに伊勢に下り、齋宮となっていた同母姉の大来皇女と逢ったことが「万葉集」の歌。題詞によって推察できる。「懐風藻」によると、大津の謀反計画を密告したのは、その朋友の川嶋皇子であつたという。逮捕された一味は、帳内の礪杵道作・行心以外の者はほどなく赦免されている。このことからみれば、大津の計画も事実無根ではなかったが、天武皇后の鶴野讃良(のちの持統天皇)を中心とする草壁皇子擁立派が、それを事前に察知し、大津抹殺のために利用したのであろう。大津の亡骸は初め本薬師寺跡の地に葬られ、後に葛城の二上山に改葬された。「懐風藻」に「五言臨終一絶」など4篇の詩があり、「万葉集」に石川郎女との贈答歌、石川郎女との婚を津守連通の占により明らかにされた時の作歌、死に臨んで磐余池で詠んだ歌、黄葉の歌などがみえる。他に大来皇女が弟を想う歌がある。